

長野県東筑摩郡波田町
下島（梓川高校敷地内）遺跡

—縄文時代前期末堅穴住居址の発掘—



平成7年3月

長野県東筑摩郡波田町教育委員会
長野県梓川高等学校

序

梓川高等学校の学校施設（体育館等）増築事業に伴い学校敷地を含む同校の南から東の隣接地にわたる下島遺跡を、工事に先立って文化財保護の見地から記録保存を目的とする緊急発掘調査することになりました。

過去、下島遺跡からは、縄文前期下島式、同中期の勝坂式、加曾利E式の各土器、石鏃、石皿、土偶、完全の型に近い和泉式の土師器甕が出土しております。今回の発掘では、縄文時代前半と考へられる波田町ではめずらしい時期の住居址の発見がありました。波田町でも最も古い「イエ」のあとといえます。今後の郷土史の解明の手がかりになることを期待しております。

本調査にあたっては、発掘調査を多数手がけている樋口昇一先生を発掘団長としてお願いし、県教育委員会文化課をはじめ多数の方々のご指導・ご協力をいただきました。

終わりに今回の調査に際しまして、多大なる御協力・御理解を示された関係各位に心から敬意と感謝を申し上げ序といたします。

平成7年3月31日

波田町教育委員会

教育長 高坂明子

例　　言

- 1 本書は長野県教育委員会の指導を受けて、事業主体の長野県梓川高校が小体育館の建設にあたり、同地内の埋蔵文化財の保護に際し、波田町教育委員会と協議して記録保存したものである。
調査期間は平成6年4月から同7年3月までである。
- 2 発掘調査は波田町教育委員会が主体となり、樋口昇一（長野県埋蔵文化財センター参事）を指導者とし、地元有志の協力で実施した。
- 3 本遺跡は「下島遺跡」（県史では「波田遺跡」、町史では「下島」）の名称で呼ばれているが、その実体は相当広範囲にわたるので、今回はカッコ付で「梓川高校敷地」を入れ区分した。
- 4 本書は、第1章を波田町教育委員会、第3章第2～4節を小松学（塩尻市立平出遺跡考古博物館学芸員）が分担し、他は樋口昇一が執筆し、あわせて編集した。
- 5 発掘調査に係わる諸資料は波田町教育委員会に保管してある。
- 6 発掘調査にあたり、県当局や地元関係機関のほか、塩尻市立平出遺跡考古博物館からは物心両面で多大の援助を受けた。深く感謝したい。

目 次

序	
例 言	
第1章 発掘調査にいたるまでと調査経過	1
第2章 下島遺跡とその周辺	2
第3章 発掘された遺構と遺物	
第1節 住居址	4
第2節 土器	7
第3節 石器	13
第4節 長野県内における縄文前期末の集落	14
第4章 まとめ	16

図 版 目 次	挿 図 目 次
図版1 遺跡遠景	第1図 下島遺跡付近地形図
図版2 遺跡近景	第2図 発掘地点付近
図版3 遺跡近景	第3図 住居址実測図
図版4 住居址の発掘風景	第4図 長野県の縄文前期末～中期初頭の住居
図版5 床面の検出	第5図 出土土器拓影(1)
図版6 炉址上部	第6図 出土土器拓影(2)
図版7 炉址の断面	第7図 出土土器拓影(3)
図版8 焼土層の堆積	第8図 長野県内出土縄文前期末の土器
図版9 出土土器	第9図 出土石器実測図
図版10 出土土器	第10図 長野県下における縄文前期末遺跡の分布
図版11 出土石器	
図版12 遺物出土状態	
図版13 ピット発掘状態	表 目 次
図版14 住居址全景	第1表 出土土器観察表(1)
図版15 住居址全景	第2表 出土土器観察表(2)
図版16 遺跡の現況	第3表 長野県下における縄文前期末遺跡一覧

第1章 発掘調査にいたるまでと調査経過

- 1994（平成6）年 4月2日 梓川高校小体育館建設に伴う埋蔵文化財（以下「埋文」）保護について県教育委員会（以下「県教委」）より事前協議の指導を受け、建設事業の現場責任者としての梓川高校と埋文行政を担う波田町教育委員会社会教育課が保護対策について協議する。指導者として樋口昇一（財）県埋文センター参事をお願いする。
- 4月5日 同時に埋文協議が必要となっていた波田町下島遺跡（工場建設）の現場視察の折、本遺跡も下見を行う。テニスコート部分は大半が整地を受け、梓川寄りの北（崖）側に遺構の存在する可能性があるので、7月に入り試掘を行い、その結果によって保護方法を決定することになる。
- 7月11日 午前中、小型重機により小体育館建設範囲全体に幅約1mのトレンチを3本入れる。全域にわたって表土が浅く約20~30cmでローム層になり、ところどころテニスコート造成時に穴などが掘られていることがわかる。しかし、一部崖寄りに包含層らしい部分があり、本格的試掘の必要を認め、8月に行うこととする。
- 8月1日 猛暑の中、小型重機によりトレンチを更に3本入れ、一方、小体育館建設範囲外には試掘ピットをあける。その結果、大半はテニスコート造成時に表土が動かされ、東側でローム層まで削られて平坦にされていることがわかる。西側でも崖側に一ヶ所のみ住居址らしい黒色土の落込み範囲があるが、それ以外は遺構が無いことが判明する（図版2・3）。
- 8月4日 県教委文化課百瀬新治指導主事来校し、町教委・高校側も加わり、樋口から試掘結果を報告し、「記録保存」のための発掘調査を実施することになる。しかし、作業員確保や猛暑のため9月中旬からの調査実施を決定する。
- 9月16日 試掘の結果判明した住居址想定部分の調査に入る。土層の状況から住居址の存在がほぼ確実となる（図版4）。
- 9月19日 表土下に現れた黒色土の落込みを追い、住居址の範囲ほぼ認定。一部床面検出に入る。以後、雨や地元祭礼のため作業員集まらず一時中断。
- 10月5日 作業進むが住居址のプラン明確でなく、周壁の確認が難しい。そのうえピットが床面に多く作業はかどらない。
- 10月6日 夕方までにはほぼ完掘、発掘作業終了とする。
- 10月7日 住居址の実測と出土遺物の整理作業をし、撤収。

1994年11月～1995（平成7）年3月 出土遺物・遺構の整理作業、報告書執筆にあたる。

第2章 下島遺跡とその周辺

本遺構は、梓川高校の校地西隅にあり、梓川右岸第2段丘（森口面）の縁辺部にあたる。現梓川との比高は約20mほどある。この段丘面の縁辺部には上野・草原と本遺跡が連続している（第1図・図版1）。

この3つの遺跡は、一応区分されているが、段丘縁辺に沿った連続した「遺跡群」かも知れない。ともに縄文時代中期を主体とする遺物が出土しており、数グループの集落が場所を移しながら全面に展開していたと考えられる。現状ではそれを確認できないが、昭和20～30年代の開発のはじまった当時、相当量の遺物が出土していたらしい。

この3つの遺跡のうち、著名なものは草原である。昭和39年～54年まで12次にわたる学術調査が故小松虔氏を指導者として松商学園高校によって実施され、縄文中期住居址21、中期末～後期初頭の敷石住居址4、後期の平地住居1などが発掘調査され、長野県内における典型的な敷石住居址と、耳飾りをつけたほぼ定形の土偶で注目をあつめた。縄文時代以外にも平安時代や中世の住居址や遺構、遺物も出土しており、長期間にわたる人々の生活空間であったことが知られている。なお、昭和55年には土地改良工事に伴う緊急発掘で縄文前期・中期・後期の遺構・遺物が出土している。指導者小松氏の急逝などで正式報告書が未刊なのが残念だが大要は『波田町史』（昭和62年刊）に掲載されている。

本遺跡については、昭和30年代梓川高校に奉職していた故中島豊晴氏によって、校地内や周辺から集



第1図 下島遺跡付近地形図(1:15,000) (1. 下島-×印発掘地在一、2. 草原、3. 上野)

められた遺物が学校に保管され、波田町内の遺跡についてもある程度踏査されていたが、氏の転勤によって計画されていた町内遺跡・遺物の概要が未刊のままになったのが残念である。生前、波田町の町史の時にでもまとめたいが学校に残してきた写真・実測図などの資料が見つからず困っているというお話をよく聞いたが、専門家として唯一在住者ただだけに惜しまれる結果といえよう。「梓川高校敷地内に3~4ヶ所の遺物出土地点があるが、近くの宮地鉄工所辺りまで一連の遺跡であり、平出遺跡(塩尻市)などに匹敵する縄文中期の大遺跡であろう」というのが氏の見解であり、できうれば学術調査を町当局に計って実施したい夢をもつづけていた。

ところが、中島氏の転勤後、昭和30年代の後半、波田中学校に奉職された田中守・細萱広美両氏が、公民館から『波田村の土器石器』という小冊子(50頁)を昭和40年に公刊された。中学校のクラブ活動の一環として、中学校所蔵の遺物を中心に、小学校・梓川高校や村内在住の個人所有のもののはか松本市立博物館(現日本民俗資料館)や信州大学文理学部(現医学部解剖学教室)所有の町内出土品まで加えて写真を主とし簡単な解説を加えた手ごろな内容の冊子を作られた。村内の地図上に縄文・弥生・土師・須恵の土器出土地点を記入し遺跡の所在も明らかにしてあり、この一冊ではほぼ村内の考古学的様相がわかるようになっている。学校蔵品の中には出土地不明のものが多いが、今となっては貴重な記録である。昭和40年当初、こうした町村単位で考古学的遺物を一般の人々向けや学校教育の中にとり入れたことは県内でもおそらく例をみないことであり、田中・細萱両氏はもちろん、その成果を公刊された公民館当局の功績は高く評価されるものであろう。ちなみに、この本の中で本遺跡(梓川高校敷地)と直接関係ある遺物としては、縄文時代前期の破片と中期の完形復元土器3ヶ、土師器の同じく完形の壺1ヶ(梓川高校農場出土)がある。遺跡名が現在とちがっているものもあるがほぼ間違いないであろう。

その後、昭和40年度から県内開発計画予定地及びその周辺地域の総合的な、また基礎的な遺跡分布状況の再検討が、県教委によって開始された。当波田町はその第一回「新産都市等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査」の対象地域に入り、「松本市周辺一中信平地区」の一環として故藤沢宗平氏を団長とする中信地区の委員によって町内遺跡の踏査が昭和41年10月から年度末にかけて実施された。

その結果は、同報告書に2頁にわたって記述されている。同書では本遺跡は「波田遺跡」の名称が使われており下記のように記述されている。

「本跡は梓川高校敷地を起点として梓川の河成段丘右岸近縁の狭小な遺跡で、大方は同校の農場と運動場となっている。遺物は縄文中期の勝坂式(壺)と石斧の出土があった。」

梓川高校敷地を起点として森口神社、三溝原遺跡迄の東西約2,000m、巾4,500mの河成段丘縁辺地帯は波田村最大の縄文期の遺跡で壺、石皿、土偶が出土(昭32. 3)している。高校の農場は心配ないが、他地域は松本電鉄線下島駅、森口駅の近くで交通の便なる地故、宅地造成が進み始めているから十分な調査が早くなされることを望んで止まない。」

「波田村最大の縄文期遺跡」という評価が注目されよう。

また昭和46年度には「農業振興地域等開発地域」対象の分布調査が県教委によって実施され、県内8市町村の一つとして本町も加わった。小松慶氏ほか3名で46年8月に町内の踏査が行なわれた。この時町当局との協議で「波田遺跡」では広汎にわたる名称すぎるとして「下島遺跡」に改称された。

「梓川の河岸段丘上の遺跡で、葦原遺跡と一連の大遺跡である。ここでは梓川高校敷地内を一応下島遺跡と呼んでいる。縄文中期と古墳時代の複合遺跡で、石皿、土偶が土器片と共に、また完形

に近い土師器（和泉式）甕が出土している。」

同報告書では上野・草原・下島3遺跡が連続するように遺跡範囲が記入されている。

その後本遺跡にかかる調査は今回まで行なわれていない。梓川高校自体はもちろん、遺跡範囲内にはその後工場や住宅が次々に建設されたが、分布・確認調査などもされず相当縮減してしまったと考えられる。体制の不備とはいえ「波田町第一の中期遺跡」だけに残念というほかはない。

今回は県教委のすばやい対応と理解により、わずか住居址一軒のみの調査とはいえ、保護対策が学校や町教育委員会の協力で実現できた点は、今後の埋蔵文化財保護のため大きな役割を果たしたといえよう。

第3章 発掘された遺構と遺物

はじめに発掘した場所を簡単に説明したい。梓川高校の西北隅に屋内運動場（体育館）がある。その西側には二面のテニスコートがほぼ南北に作られていた。この付近は段丘線に近く、校地北側は4.5m巾の道路をへだてて急崖となって梓川の氾濫原である沖積地へつづいている。段丘線は西から東へわずかであるが傾斜しながら低くなっていく。標高はテニスコート面がほぼ668.0mである。

屋内運動場をつくるときに多少盛土されたらしく、西側のテニスコート部分はローム層面まで削平されていた。また、テニスコートの南側の旧プールのある面は一段高くなっている。この時点でもテニスコート東半部はローム層面まで削平されたらしい。そのため比較的削平されず、旧状の残った範囲が今回の調査範囲となったと推定できる。

試掘の結果、上記の如くテニスコート二面のうち、西側の一面と東側の南半部は遺構の存在が認められないで、東側のコートの北端と段丘崖に近い校地区画のフェンスまでの狭い範囲で発掘調査することになった。この部分は住居址発見範囲にも一部後世の擾乱があり、またテニスコートをつくる時にも外側整備のため表土層から黒色土層面まで平夷・整地されていて、自然状態ではなかったが、幸いにも住居址部分がよく残存して調査ができたといえよう。なお、テニスコートの東側校地内は荒地となっていたり、段丘縁辺部なので住居址の検出を想定したが、現状は相当擾乱のため動いており、遺構の存在は可能性なしと判断し、住居址範囲のみを中心に発掘調査する方針をとった。

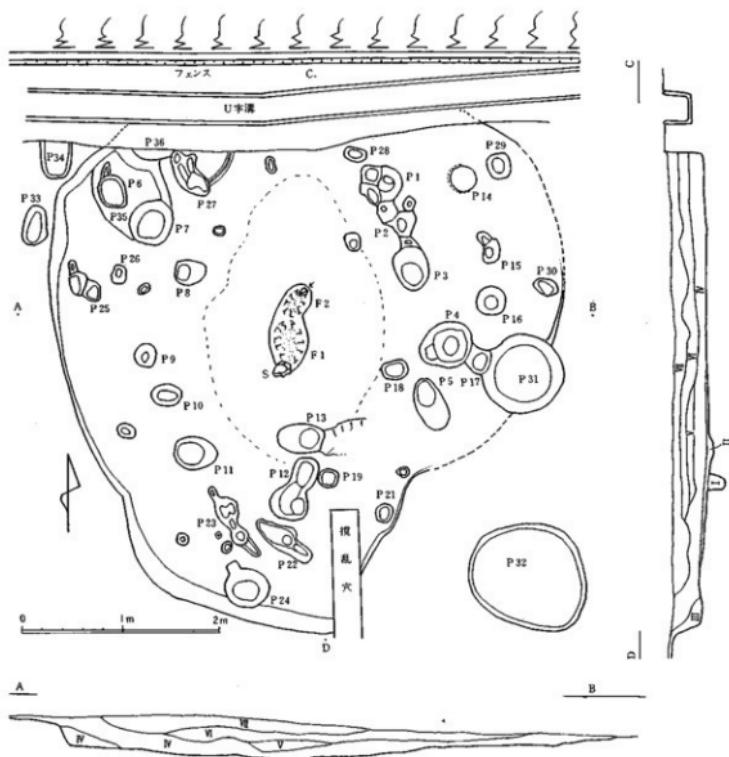
第1節 住居址

平面形が最後まで明確につかめなかった。ここでは一応、南側にやや方形の張り出し部をつくる円形の竪穴住居址として理解したい。短径（東西）約5.2m、長径（南北）約5.8m（推定）で南側に約2.5m×1.2mの方形張出し部がつく。

検出面はテニスコートを造るときに表土が約15~25cm



第2図 発掘地点付近 (○印)



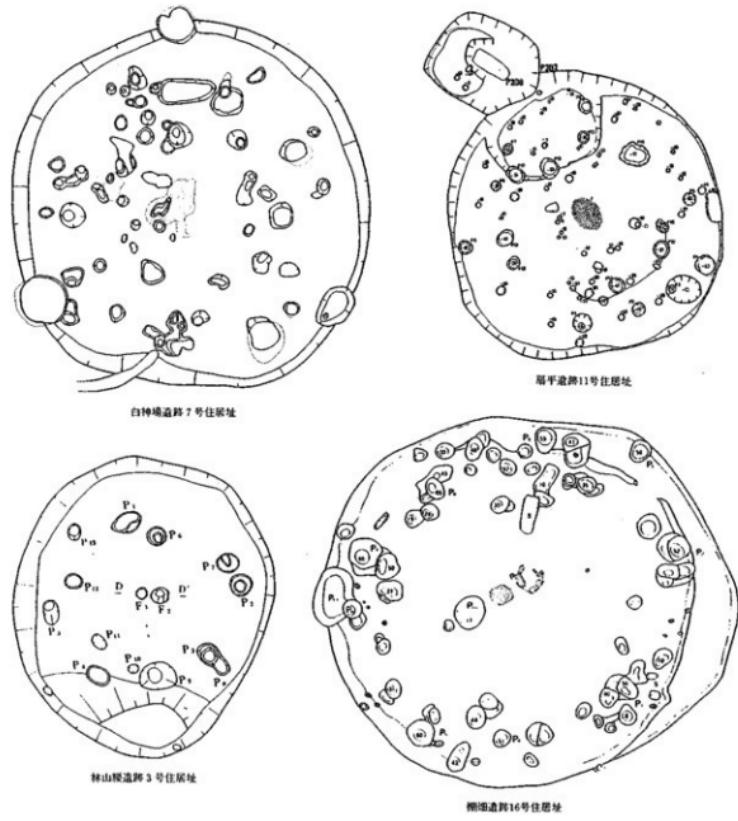
第3図 住居址実測図

ほど平らにされたらしく、その下層の黒色土層（VI・VII層）の広がりで確認された。しかし、住居址周壁付近は40~50cmほどの幅で自然埋没らしい黄褐色土層（II~IV層）が堆積し黒色土層の下部へもぐって床面上を覆っていた（図版5）。上層が削平されていたので比較的早く住居址の存在を予測したが、前記したように東半分は傾斜の低い方のうえ、攪乱で不明確であった。

周壁は傾斜の高い西側で約30m前後の深さがある。しかし、東側では最も深い部分で15cm前後あるが、大半は壁を確認できなかった。周壁はわずかに住居内に傾斜するが、ほど直に床面につながっている。方形張り出し部のみがややゆるやかである。周溝は認められなかった。

炉は住居のほぼ中央に2ヶ連続した形で残っていた（図版6）。南北1m、東西40~30cm。F₁からF₂にかけて10~20cmの焼土層がほど全面にあった。連続したF₁・F₂ともにその両端に人頭大から拳大の河原石が1ヶある。炉の底は深さ10cmぐらいでさほど深くなく、全面がかたく焼けていた。連続した炉のあり方から住居の重複を想定してみたが、周囲の床面状態や炉自身の切り合い、焼土の堆積からみて同時期であろう。炉石を取りはずした凹みもなく、地床炉としてよいであろう（図版7）。

なお、炉址とは直接つながらないが、相当多量の焼土・灰を含む層（V層）があった。炉の南側あたり



第4図 長野県の縄文前期末～中期初頭の住居（上：前期末、下：中期初頭）

に床面を覆う黄褐色土層の上部（床面から約5～15cm）に径80cm前後の広がりをもち、厚い部分で15cmほどあった。住居廃絶後、黄褐色土層（IV層）が堆積した時点で、何らかの火を燃やす行為が戸の周辺で行なわれたと考えられる。この焼土やスミの層の上部にある黒色土層の上半（VII層）は、焼土は皆無だが炭化物が多く、反対に下半部（VI層）はそれが少なく、黒色土層を二分できる部分があった。またP₁₁の上部黒色土層中にも焼土がわずか検出されている。

床面はローム層をかたく踏みかためた部分が中央に広がって（点線内）、中期住居址にみられるようなバカバカとはがれるような良好な残り方をみせたが、周壁に向かうに従って軟弱となり、かたさがみられなかった。全体的に中央戸に向かってわずかに皿状に凹んでいるが、ほぼ平坦とみてよい。しかし、中央付近の踏みかためられた部分にも二、三床面がはがされた部分があった。

床面上のビットは、大きさ、深さなどさまざまであり、この中から柱穴を特定することはむずかしいが、ただ炉F₁・F₂のある中央部ではなく、周壁から50～60cmに並ぶようにもみえる。

深さ（-20～50cm）。大きさと位置を目安として、一応柱穴を想定すれば、P₁～P_nとなる。東側のP₁～P₅、西側のP₆～F₂はとともに周壁からやや離れて中央に向かって内側にカーブしているようにみえる。入口部を方形張り出し部とすると、P₁～P₅などはP₂～P₅などとともに入口に係わる柱穴とも考えられる。またP₁～P₅の外側に並行してならぶP₄～P₅は拡張時の柱穴の可能性もある。

貯蔵穴らしいピットはその形状から周壁にくいこんだ東壁のP_n、住居南東の外側にあるP₂、北西隅のP₂・P₃などがあてられ、方形張り出しのP₂は後世のものである。その他は浅く（-5～15cm）形も小さいので木の根などによるものとしたい。

第4図にあるように前期末～中期初頭の住居址は、円形を主とするが、住居内部の諸施設をみるとあまりはっきりしないのが特色といえる。戸も比較的小さく痕跡的で、柱穴も中期のように4～5本の主柱穴といった例は少なく、周壁付近や全体に散在する傾向がある。本住居址もその一例といえよう。

なお、土器。石器はすべて、住居址埋土中からの出土である。このほか小児の頭～拳大の自然石が10数ヶ出土したが、特記するようなことはなかった。

第2節 土 器

本遺跡から出土した土器は、縄文前期末（約5,500年前）が主体を占め、他の時期の土器は僅かしか見られない。ここでは、時期及び文様要素により次のとおり分類をした（第5～7図・図版9・10・12）。

第I群 縄文早期押型文期に比定される土器（1）

第II群 縄文前中期に比定される土器（2～80）

第1類 浮線や隆帯により文様が構成される

a種 浮線に施文がなされないもの（素浮線） b種 浮線に半截竹管による押引きがなされるもの（結節浮線） c種 隆帯上に押捺がなされるもの（押压隆帯） d種 隆帯に施文がなされないもの

第2類 沈線により文様が構成される

a種 沈線を籠状工具により切っているもの b種 沈線間に半截竹管による押引きがなされるもの c種 地文に縄文を有するもの d種 沈線のみが施文されるもの

第3類 三角印刻文および刺突により文様が構成される

a種 沈線と三角印刻文及び刺突が組合わされるもの b種 三角印刻文及び刺突のみが施文されるもの

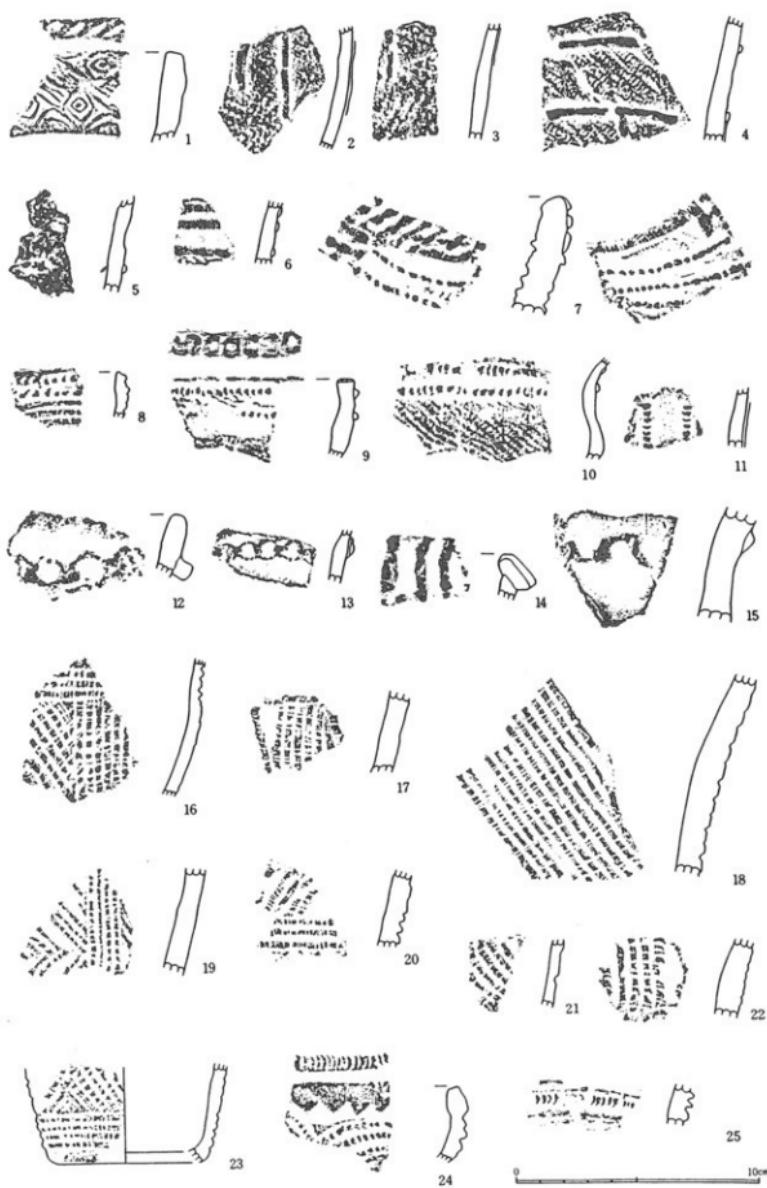
第4類 縄文および撚糸文により文様が構成される

第5類 無文

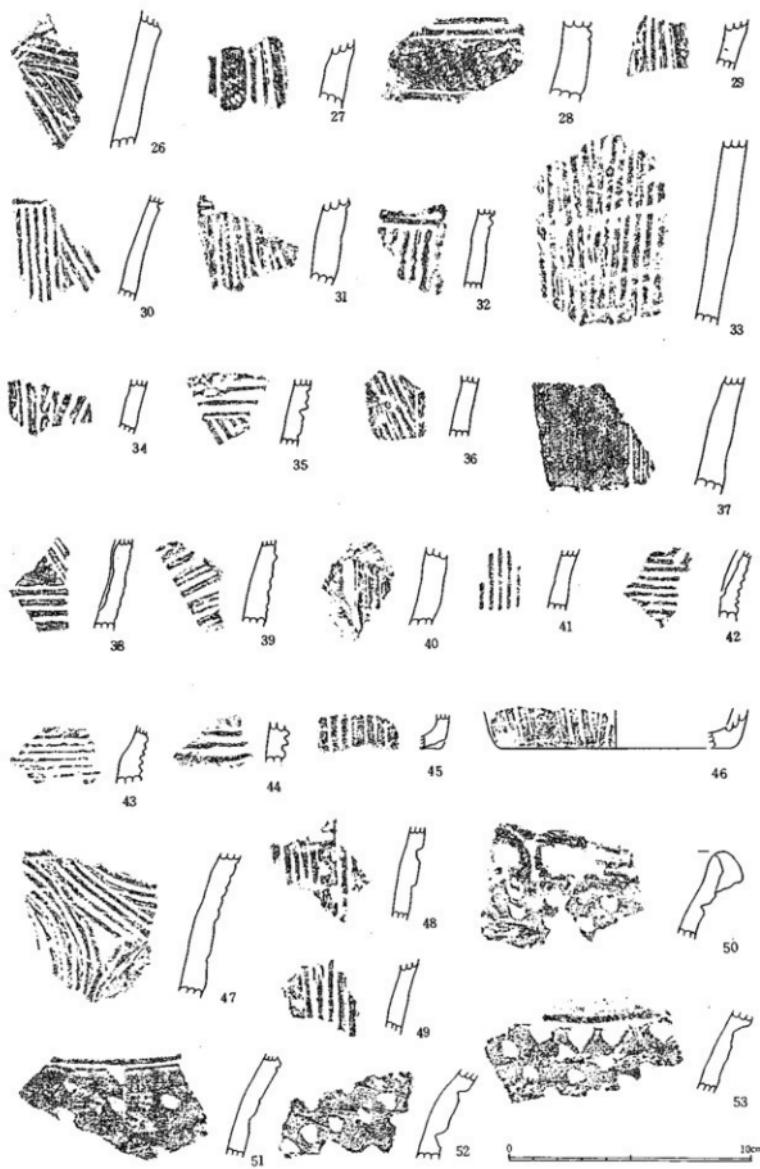
1は縄文早期の押型文土器で、中部地方ではあまり見られない幾何学的文様をモチーフとした、東北地方に多く見られるタイプの土器である。近辺に同期の遺跡があるかも知れない。

2～6は、幅2～4mmの浮線文をもち、地文として縄文がみられる。地文の縄文はR L縄文が主体であるが、6のようR L縄文とL R縄文を用いて羽状構成となるものもある。2・3は縦位、4～6は横位の浮線文で、4には横位の浮線から垂下するように浮線文が施されている。

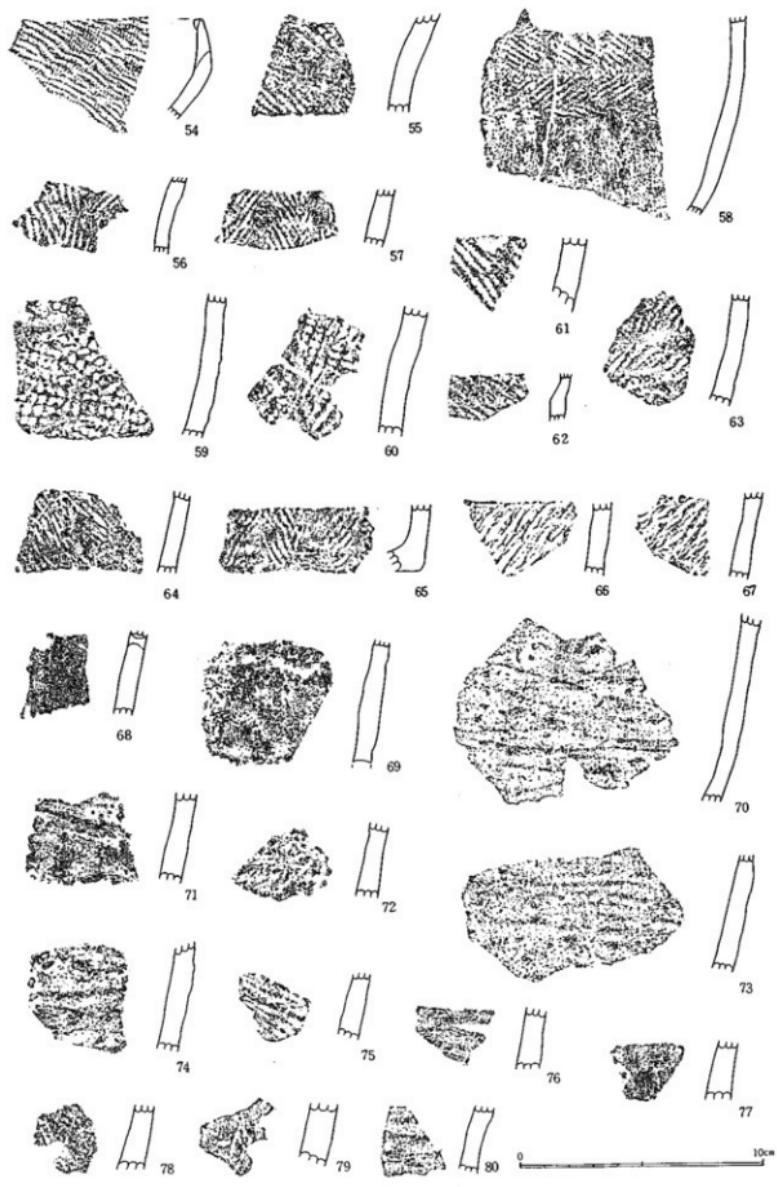
7～11は結節浮線文である。7は波状口縁を呈し、口縁上部には浮線文が格子目状に施され、器内に



第5図 出土土器拓影(1) (1:2)



第6図 出土土器拓影(2) (1 : 2)



第7図 出土土器拓影(3) (1:2)

も結節浮線文がみられる。8は口唇直下に2条の結節浮線文がめぐり、その下部に沈線が横走している。9の口唇にはドーナツ状の貼付があり、口唇全域に廻っていたと考えられる。

12・13は押圧隆帶のみで、地文はみられない。14・15は隆帶のみで文様が構成されている。14は口唇まで縦位の隆帶が、また15は隆帶が波状に施文されている。

16～23はヘラ切り沈線で文様構成されている。文様は横位と縦位のヘラ切り沈線により区画された区画内に、同じくヘラ切り沈線がXまたは△状を呈するように施文されている例が多く、ヘラ切り沈線を曲線で描くものはみあたらない。

24・25は結節沈線文の例である。24の口縁上部には三角印刻文がみられ、その下部には結節沈線が弧状に施文されている。25は横位の結節沈線文があるが、上下の文様構成は不明である。

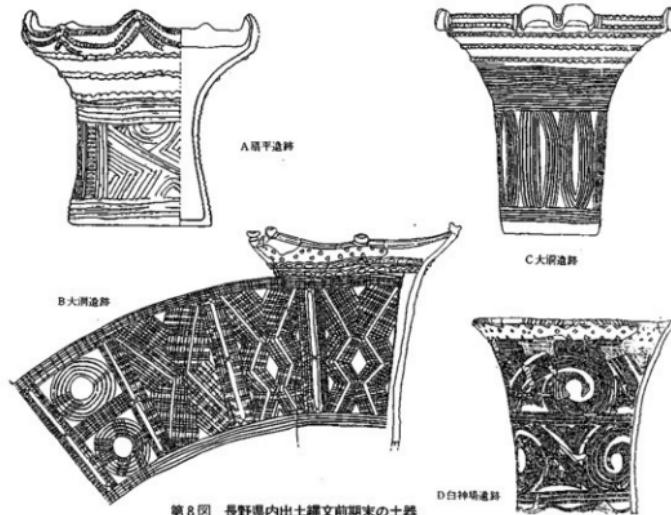
26～46は沈線により文様が構成され、26～28には地文にP L繩文がみられる。29～46は沈線文のみで文様が形成されているが、ヘラ切り沈線文と同様に直線的な文様が主体となり、文様構成上でも類似したモチーフが描かれていたと思われる。

47は集合沈線間に三角印刻文が施され、48・49には沈線上に刺突がみられる。50～53は口縁および口縁部付近の破片で、刺突により文様が構成される。50は波状口縁で隆帶の貼付が、また53には刺突のほかに三角印刻文が施文されている。

54～65は繩文のみの例で、57・58・65は羽状を呈する。羽状はすべてR LとL Rの2種類の繩文原体を使って施文され、58には末端部の処理がみられる。66・67は撲糸文が施されている。

68～80は無文土器であるが、70・73などのように器面調整の痕跡が明確に残るものもみられる。また68には補修孔がみられる。

以上第1群の一片をのぞく本遺跡出土の土器はすべて小破片のため、器形や文様構成などを理解する上で便利なように、県内各地出土の同時期土器を第8図に掲げておきたい。



第8図 長野県内出土繩文前期末の土器

第1表 出土土器觀察表(1)

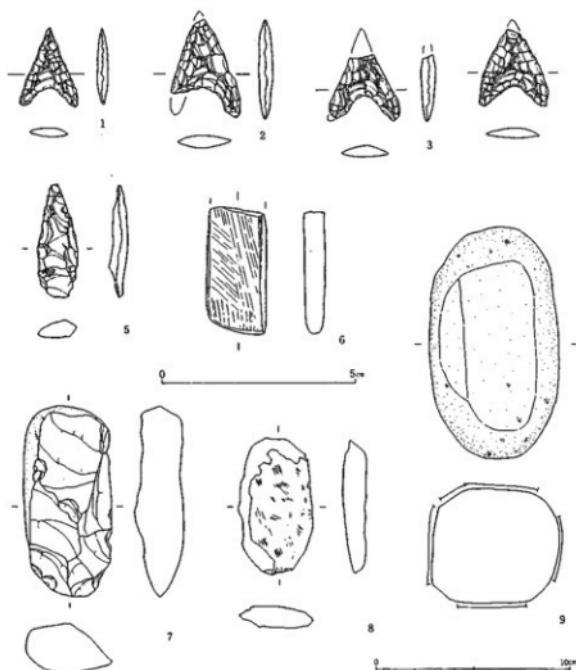
番号	器種	部位	器形および文様	胎土	色調		焼成	出土位置	備考
					外面	内面			
1	深鉢	口縁部	口縁	粘	暗褐色	暗褐色	良好	1E3K1L1-焼結地	口縁部
2	"	肩部	EICRL1L1 83-Sanの附	粘-粘	褐色	*	*	1E1K1L1	
3	"	"	EICRL1L1 82mmの附	粘	*	黑色	*	1E3K1L1-焼結地	
4	"	"	EICRL1L1 83-4mmの附	*	*	褐色	*	1E4K1L1	
5	"	"	EICRL1L1 82-3mmの附	粘	*	暗褐色	やや良	1E2K1L1	
6	"	"	EICRL1L1 10の附	*	暗褐色	茶褐色	良好	1E4K1L1	周縁部
7	"	口縁部	口縁 細目附	粘	褐色	褐色	*	1E2K1L1	周縁部
8	"	"	細目附 細目附	*	*	*	*	1E4K1L1	
9	"	"	細目附	粘-成	黒褐色	暗褐色	*	1E3K1L1-焼結地	口にタケ付属
10	"	口縁部付近	EICRL1L1 8mmの附	粘	暗褐色	*	*	1E4K1L1-焼結地	
11	"	胸部	細目附	*	褐色	褐色	*	1E3K1L1-焼結地	
12	"	口縁部	口縁	粘	暗褐色	*	*	1E3K1L1	
13	"	口縁部付近	*	粘	褐色	*	*	1E2K1L1	
14	"	口縁部	縫	粘	暗褐色	黒褐色	*	1E2K1L1	
15	"	口縁部付近	*	白灰	黒褐色	褐色	*	1E2K1L1	
16	"	肩部	八重目附	*	褐色	*	*	1E4K1L1	
17	"	"	*	粘	*	*	やや良	1E2K1L1	
18	"	"	*	粘	黒褐色	赤褐色	良好	1E4K1L1	
19	"	"	*	粘-白灰	褐色	暗褐色	*	1E3K1L1-8mm	
20	"	"	*	粘	暗褐色	*	*	1E2K1L1	
21	"	"	*	粘	褐色	褐色	*	1E2K1L1	
22	"	"	*	粘	茶褐色	茶褐色	*	1E4K1L1	
23	"	底部	*	粘	褐色	暗褐色	*	1E2K1L1	
24	"	口縁部	EICRL1L1 3mmの附	粘-白灰	*	褐色	*	1E4K1L1	口にナガリ付属
25	"	胸部	EICRL1L1	粘	*	*	やや良	1E3K1L1-焼結地	
26	"	"	EICRL1L1 細目附	*	*	*	*	1E3K1L1	
27	"	"	EICRL1L1 8mm	*	*	*	*	1E2K1L1	
28	"	"	*	*	*	*	*	1E3K1L1-焼結地	
29	"	"	EICRL1L1	粘	*	*	*	1E4K1L1-焼結地	
30	"	"	細目附	粘	茶褐色	*	*	1E3K1L1-焼結地	
31	"	"	細目附	粘	暗褐色	*	*	1E3K1L1	
32	"	"	*	粘	褐色	茶褐色	*	1E2K1L1	
33	"	"	*	粘	*	褐色	*	1E2K1L1-焼結地	
34	"	"	*	白灰	*	*	*	1E4K1L1	
35	"	"	*	*	黒褐色	暗褐色	*	1E2K1L1	
36	"	"	細目附	粘	褐色	黒色	*	*	
37	"	"	細目附	*	暗褐色	暗褐色	*	1E3K1L1	
38	"	"	*	粘	黒褐色	褐色	やや良	1E2K1L1	細目附
39	"	"	*	白灰	褐色	*	良好	1E3K1L1-焼結地	
40	"	"	*	*	*	*	*	*	
41	"	"	*	粘	*	*	*	1E2K1L1	
42	"	"	*	*	黒褐色	*	やや良	1E4K1L1-焼結地	細目附
43	"	底部付近	*	粘	暗褐色	暗褐色	良好	1E3K1L1-焼結地	
44	"	"	*	粘	褐色	褐色	*	1E2K1L1	
45	"	底部	*	粘	*	*	*	1E2K1L1	細目附

第2表 出土土器観察表(2)

番号	器種	部位	器形および文様	胎土	色調		焼成	出土位置	備考
					外面	内面			
46	深鉢	底部	鉢	胎6	褐色	褐色	良好	1E38上-焼結層	
47	"	肩部	鉢底三脚鉢		暗褐色	*	*	1E24PS	
48	"	"	鉢底	胎6	褐色	暗褐色	*	1E38上	
49	"	"	"	胎6・46	*	黒褐色	*	1E38上-焼結層	
50	"	口縁部	鉢	胎6	茶褐色	褐色	*	1E46上	
51	"	口縁前付近	"	胎6	暗褐色	黒褐色	*	1E46上	
52	"	"	"	胎6	褐色	褐色	*	1E46上	
53	"	"	三脚鉢 鉢	胎6・46	*	暗褐色	*	*	
54	"	口縁部	BLIX	胎6	暗褐色	褐色	*	1E38上	
55	"	肩部	"	*	褐色	*	*	1E38上-焼結層	
56	"	"	"	胎6	*	*	*	1E38上	
57	"	"	BL+LREBLX	胎6	暗褐色	*	*	1E38上-焼結層	
58	"	"	BL+LREBLX 肩の部分のみ	*	*	*	*	1E38上	
59	"	"	BLIX	胎6	褐色	*	*	1E38上-焼結層	
60	"	"	LUX	胎6・46	*	暗褐色	*	1EAB4下	
61	"	"	LUX	胎6	黒褐色	褐色	*	1E46上	
62	"	"	LUX	胎6	暗褐色	黒褐色	*	1E38上	
63	"	"	"	胎6	黒褐色	暗褐色	*	1E46上-焼結層	
64	"	"	BLIX	*	暗褐色	褐色	*	1E38上-焼結層	
65	"	底部	BL+LREBLX	胎6・46	褐色	*	*	1E46上	
66	"	肩部	鉢	胎6	*	*	*	1EAB4下	
67	"	"	"	胎6	*	*	*	1E46上	
68	"	"	鉢	胎6・46	*	茶褐色	*	1E38上	BRAN
69	"	"	"	*	*	褐色	*	1E46上	
70	"	"	"	胎6	暗褐色	暗褐色	*	1E38上-焼結層	
71	"	"	"	*	茶褐色	褐色	*	1E46上	
72	"	"	"	胎6	褐色	暗褐色	*	1E46上-焼結層	
73	"	"	"	胎6・46	暗褐色	*	*	1ンチ	
74	"	"	"	胎6(鉢)	褐色	褐色	やや良	1E結層	
75	"	"	"	胎6	*	*	良好	1EAB4上	
76	"	"	"	胎6	暗褐色	*	*	1E46上-焼結層	
77	"	"	"	胎6	褐色	*	*	1E38上	
78	"	"	"	*	茶褐色	暗褐色	*	1E46上	
79	"	"	"	*	褐色	褐色	やや良	1E38上	
80	"	"	"	胎6	*	*	良好	1ンチ	

第3節 石 器

出土した石器の点数は少なく、石鎚が主体を占めている。第9図1~5の石鎚のうち、チャート製の5以外は黒曜石が素材として使用されている。基部の形態はいずれも無茎鎚で、1~4が凹基、5が平基である。6は滑石製の丸状耳飾の一部で垂飾りであろう。7は片面のみが加工され、細部の調整もほとんどなされていない粗製の石斧である。8の蛇紋岩製の磨製石斧も7と同様、片面に研磨が施される



第9図 出土石器実測図(1:2)

だけで、もう片面には研磨の痕跡がみられない。9の磨石には全面にわたって磨られた形跡が確認でき、使用頻度はかなり高かったと考えられ。粗粒凝灰岩が石材として用いられているため、柔らかく加工は比較的容易に行われたと思われる。このほか住居址埋土から出土した大小の石塊を精査したが加工痕はなかった。

第4節 長野県内における縄文前期末の集落

全国的にもこの時期は類例があまり多くないので、参考までに長野県内の縄文前期末の遺跡や住居址について少し触れておきたい。

1万年もの長きにわたって続いた縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晚期と大きく区分することができる。これらの時期は各々異なった時代背景のもと、様々な生活が繰り広げられていた。

県内においては、草創期から中期にかけて順調な展開がみられるが、続く後期・晚期になると遺跡は激減してしまう。本遺跡の営まれた縄文前期は、飛躍的発展を遂げる中期の前段階として重要な意味をもつ時期である。縄文前期は集落内における住居数の増加や住居の拡張、建て替えが多くみられるようになることから人々の定着性が強くなったことが窺え、環状や馬蹄形といった形態をとる集落も登場す



第10図 長野県下における縄文前中期遺跡の分布

いいた明確に規定された形態をとらず、住居内縁辺を廻るように配置されるものが多くみられる。住居に伴う炉については石垣炉はほとんど無く、地床炉や埋甕炉が中心である。

いずれにしても、当該時期は不明な点が多く今後に多くの課題が残されている。

第3表 長野県下における縄文前中期道路一覧（第10図と遺跡Noは対応）

番号	路線名	所在地	検出実績
1	下島遺跡	東筑摩郡波田町	前期末(1)
2	唐沢遺跡	東筑摩郡山岸村下竹田	縦縫c(2)
3	古屋遺跡群	塩尻市片丘南内田	縦縫c～十三春縫(5)
4	白神場遺跡	佐本市寺小赤	前期末(6)
5	高尾遺跡群	塩尻市片丘北熊井	縦縫c(1)
6	五納遺跡群	塩尻市金井	縦縫c(2)
7	大糸遺跡	岡谷市	前期末(8)
8	西戸遺跡	岡谷市小尾口	窓縫II(1) 前期末(1)
9	西林八遺跡	岡谷市神明町	前期末(1)
10	荒神山遺跡	諏訪市諏訪	日向I(1) 日向II(1)
11	本城遺跡	諏訪市諏訪	日向I～II(1)
12	麻平遺跡	岡谷市長地横川	日向I(2) 日向II(4) 窓縫I(2) 窓縫II(1) 前期末(2)
13	武蔵林遺跡	諏訪郡下諏訪町京山田	日向I～窓縫I(6)
14	一の矢遺跡	諏訪郡下諏訪町	前期末
15	上せの台遺跡	茅野市末沢	日向I(1)
16	高風呂遺跡	茅野市	前期末
17	安原遺跡	諏訪郡富士見町鳥帽子	日向I(3) 日向II(2) 窓縫I(3) 窓縫II(4)
18	上の林遺跡	上伊那郡箕輪町	窓縫II(1)
19	月見松遺跡	伊那市小沢	前期末(1)
20	中村遺跡	上伊那郡中川村	前期末
21	中島平遺跡	飯田市三日市場	縦縫(1)
22	立ヶ花遺跡	中野市	前期末
23	織治原遺跡	小県郡東部町	前期末
24	竹之城原遺跡	北佐久郡須坂町	日向I(1)

第4章 まとめ

わずか1軒の住居址と少ない遺物が出土した発掘調査であったが、今まで縄文中期のみが注目されていた波田町で、縄文前期末の類例の少ない資料がえられた点は評価されるであろう。

最も繁栄した縄文中期文化は、県内ではハッ岳西南麓の諏訪から、天竜川流域の上伊那と下伊那の北半まで、また松本平の南半を含む広い範囲が特に遺跡密集地帯として、全国的に有名で、いわゆる「井戸尻文化」の中心地と目され「縄文王国」とも呼称されてきた。

波田町内にも本遺跡を含む梓川右岸段丘上や北アルプス西麓に広がる扇状地には下原・麻神遺跡など縄文中期の大遺跡が並んでいる。隣接する山形村・朝日村の扇状地や山麓、更に塩尻市に及ぶ一帯と盆地を挟んで対峙する高ボッチ・鉢伏山麓から松本の中山、山辺、岡田地区までにも、同じような縄文中期の大遺跡が展開している。かつて私が朝日村熊久保遺跡の発掘調査を通じて、このような縄文中期の拠点的集落が半径2kmほどの円内をエリヤとして、この松本平南半に数グループ存在したのではないかと想定したことがあったが、その後の調査の進展は、そのような単純なエリヤ区分のみではなく、もっと詳細かつ合理的な縄文中期の生活実態に迫る遺跡相互の構造的分析が可能なときがやってきている。その縄文王国の中心地諏訪地方における近年の研究は一段と進展しており、参考とすべきであろう。

いづれにしろ、この日本的な縄文中期文化の最繁栄地である「縄文王国」にあって、波田町の中前期遺跡はその外縁部を形成する一群であることは間違いない、強いていえば、松本平にあっての「クニ」の中の一つの「ムラ」を構成していたことだろう。ところが、この中期文化を生み出す一時期前の縄文前期についての資料はぐっと少なく、前期から中期への移行が十分把握できない。波田町内にあっても前期の単純な遺跡は皆無で、わずかに土器片を出土する遺跡が數遺跡しか知られていない。いまのところ松本全体を見渡しても前期の集落遺跡は10例にみたないので、波田町に未発見なのも致し方ないが、ただ、隣村山形村との境にある「唐沢」遺跡は前期初頭の良好な例で、波田町分にも広がる可能性は十分ある。前期土器も採集されているので今後十分注意すべきであろう。

本遺跡がこうした前期の最終末期、次の中期への転換期にあたる遺跡であり、かつ県内においても20数例しかない住居址に新資料を提供できたことを喜びたい。多分この前期末は複雑な時期一例えば土器にみられる文様や遺跡のあり方をみてもその前後との関係にスムーズな面があることははあるが、やや突出したような様相が認められる。遺跡のあり方をみても、大きな集落をつくることはほとんどなく、住居址が数軒とか単独に1軒のみで出土遺物もさほど多くない。すでに前期初頭以降中葉にはそれなりの定住性を示す柱穴や炉址をもつ定形的な住居址が完成し、一応の「ムラ」的な集落址が発見されているのに、その末葉になると全般に遺跡が小規模化して退廃的一面をみせ、その数も極端に少なくなる。ところが次の中期初頭になると徐々に遺跡数を増しながら前葉～後葉にかけての大繁栄期を迎えるという図式がえがかれる。なぜ前期末がこうなるのかについては余り明確な原因は指摘されていないが、多分気候の小変化による自然環境の混乱状態が、縄文人たちの生活にある程度の影響を与えた結果と考えられる。花粉分析などによる気候変化を証明する資料はまだないが、縄文時代全般を通して数回みられる衰退期の一つとしてとらえてよいのではないだろうか。この期をのりこえた縄文人は次の異常なまでの繁栄期を迎えるわけだが、その礎となつたこの遺跡は、幸運にも破壊されずにわずかに残っていた稀少な例といえ、それだけに今回の調査は意義があったといえよう。“波田町で一番古い5,500年前のイエ”的発見という意味でも地元町民に埋文保護の実態を知りたい機会をあたえたといえよう。



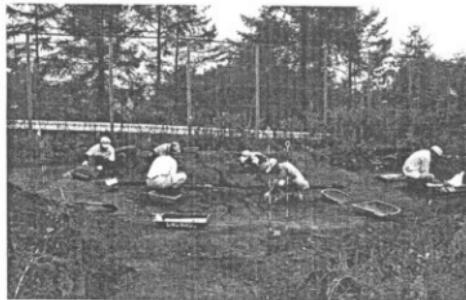
1. 遺跡遠景



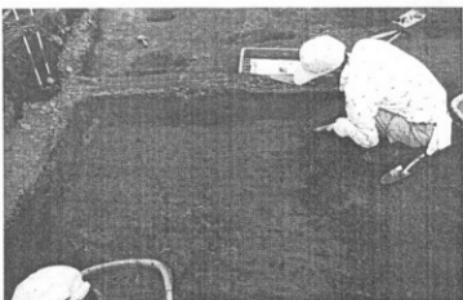
2. 遺跡近景（試掘開始）



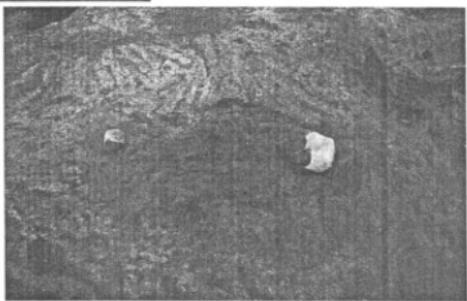
3. 遺跡近景（住居址発見）



4. 住居址の発掘風景



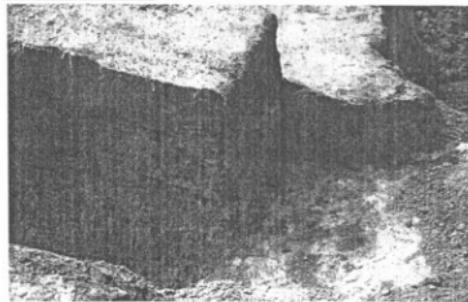
5. 床面の検出



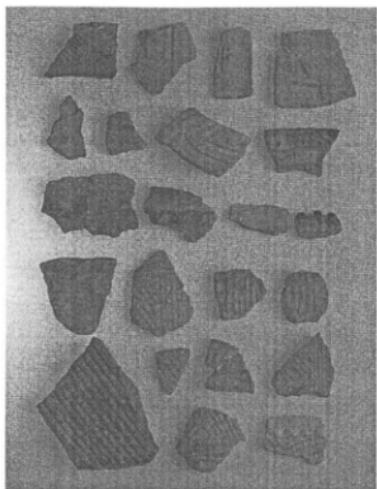
6. 炉址上部



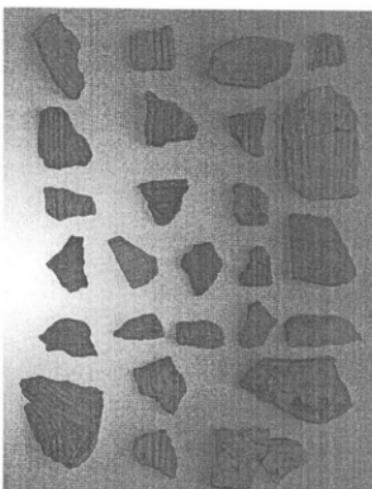
7. 炉址の断面



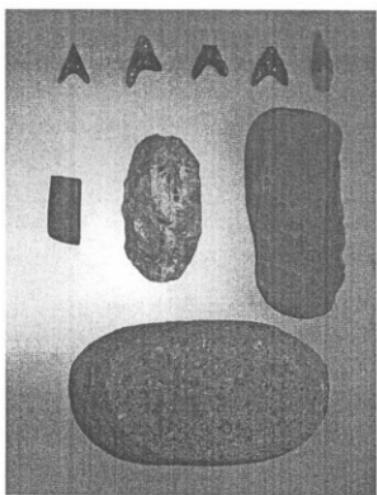
8. 焼土層の堆積



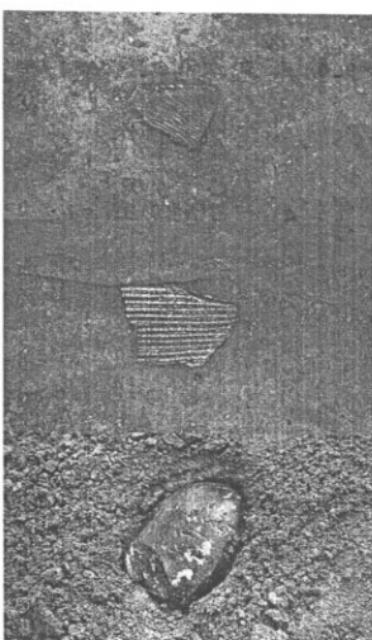
9. 出土土器



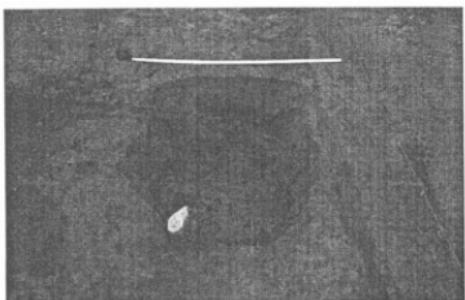
10. 出土土器



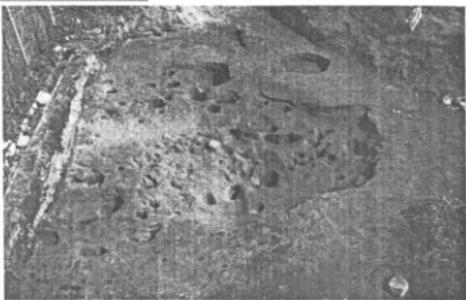
11. 出土石器



12. 遗物出土状态



13. ピット発掘状態



14. 住居址全景(西より)



15. 住居址全景 南東より



16. 遺跡の現況

報告書抄録

書名	下島（梓川高校敷地内）遺跡 —縄文時代前期末住居址の発掘—
著者名	樋口昇一・小松 学・波田町教育委員会
編集機関	長野県東筑摩郡波田町教育委員会
所在地	〒390-14 東筑摩郡波田町10106-1 Tel 0263-92-7501
発行年月日	1995年3月31日
5万分の1地図	松本
位置・標高	北緯 36° 12' 21" 東経 137° 52' 56"
概要	縄文時代前期末の住居址1軒と同時期の土器・石器少量
調査原因	高校小体育館建設に伴う事前調査
調査期間	1954年4月から1955年3月まで
調査面積	約150m ²

参考文献

- 波田町公民館 1965.3 『波田村の土器石器』
- 長野県教育委員会 1967.3 『新産業都市等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書—昭和41年度—』
- 波田村農業水利事業所 1972.3 『農業振興地域等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書—昭和46年度—』
- 関東農政局中核平農業水利事業所 1972.3 『長野県東筑摩郡波田村扇神遺跡緊急発掘調査報告書』
- 波田町教育委員会 1973.3 『長野県東筑摩郡波田村扇神遺跡第2次緊急発掘調査報告書』
- 波田町教育委員会 1980.5 『長野県東筑摩郡波田町・草原遺跡緊急発掘調査報告書』
- 波田町教育委員会 1982.3 『長野県東筑摩郡波田町・中下原遺跡緊急発掘調査報告書』
- 波田町 1987.3 『波田町誌—歴史現代編』

下島（梓川高校敷地内）遺跡

—縄文時代前期末住居址の発掘—

平成7年3月10日印刷

平成7年3月20日発行

発行 長野県梓川高校

長野県東筑摩郡波田町教育委員会

印刷 電算印刷株式会社